

示I-225 心疾患を併存する大腸癌手術例の検討 帝京大学第1外科

西岡道人、三浦誠司、野澤慶次郎、藤田正信、
捨田利外茂夫、三重野寛治、小平 進

【目的】本邦でも近年、成人病としての心疾患が増加しており、大腸癌の手術例でも散見されるようになった。急性期の心疾患症例には開腹手術が行われないことから、ここでは術前諸検査によって手術可能と判定され、手術が行われた症例を対象として術中・術後の心疾患の経過の現状について検討した。

【方法】1997年12月までの過去10年間における大腸癌手術例(332例)について併存する心疾患の種類、発症時期、術前の心エコー検査・ホルター心電図・心臓カテーテル検査等による評価、手術侵襲、術後の心疾患発症の有無を検討した。なお大腸癌と同様に近年増加しつつある非消化器癌として、同期間における肺癌手術症例(195例)についても同様の見直しを行い比較した。

【結論】大腸癌では心疾患の急性期にない症例は何らかの手術を行わざるをえない症例が多い。虚血性心疾患発症からの期間が短い症例、多大な手術侵襲、他の重要臓器の併存疾患は術中・術後の心疾患増悪に結びつくと思われた。

示I-226 遠隔成績からみた中下部直腸癌に対する括約筋温存手術の適応

和歌山県立医科大学第2外科

石本喜和男、谷村 弘、角田卓也、梅本善哉、

内山和久、大西博信、坂口 聡、木下博之、浦 希未子

過去10年間のRb直腸癌治療手術88例を、a群)中部癌38例(肛門縁より5.1~8cm;低位前方切除術LAR21例、直腸切断術APR17例)、b群)下部癌50例(5cm以下;LAR5例、経仙骨sleeve resection(SR)5例、APR40例)に分け、遠隔成績から括約筋温存手術の意義を検討した。側方転移はa群)5.8%、b群)22.4%($p<0.01$)、括約筋温存例のAWはa群)で 2.4 ± 0.6 cm確保できたが、b群)では 1.1 ± 0.4 cmであった。局所再発はa群)の1例(5.4%)に対し、b群)で吻合部再発3例を含め26.6%に発生($p<0.01$)し、占拠部位別の累積5生率は中部癌のLAR76.7%、APR73.1%、下部癌のLAR33.3%、APR61.1%で、下部癌のLARが不良であった。QOLでは、射精は神経温存の有無を問わず不良であったが、排尿障害は骨盤神経の片側温存例は術後6カ月で全例改善した。術前在職患者の社会復帰率はAPR例を含めてa群)90.5%、b群)82.6%と両者とも良好であった。【結語】中部直腸癌には括約筋温存手術が第一選択となるが、癌進展が複雑な下部直腸癌に対しては根治性が優先されるべきで、LARの適応はAW最低2cm確保が条件である。

示I-227 腸管に多発性出血性潰瘍病変を呈したB細胞性悪性リンパ腫の1例

氷見市民病院外科¹⁾、富山医科薬科大学第一病理²⁾
長尾 信¹⁾、室林 治¹⁾、宇野雄祐¹⁾、木元文彦¹⁾、
牧野哲也¹⁾、若狭林一郎¹⁾、村田修一¹⁾、
清崎克美¹⁾、北川正信²⁾

今回我々は、小腸・大腸に多発性出血性潰瘍病変を呈した悪性リンパ腫の1例を経験したので報告する。症例は71才女性、歩行障害を主訴に平成9年12月20日入院となった。入院時検査では、両下肢の筋力低下とLDH(966IU/L)の上昇を認めた。造影CT及びMRIにてTH9-L2椎体周囲に巨大な腫瘍を指摘され、生検を施行したが、2日後より貧血・タール便を認めた。精査するも原因が特定できないため緊急手術を施行した。

(手術所見)腸管の漿膜面に発赤を伴う大小の硬結を多発性に認めた。また、腸管内に多発性出血性潰瘍性病変を認め、腸管周囲のリンパ節の腫大も認めた。病変部を切除し、残存小腸は回盲部に端側吻合し、結腸は単孔式人工肛門とした。(病理結果)不整形の潰瘍(UL-2)が多発し、リンパ節は大細胞性B細胞性悪性リンパ腫で占められており、一部潰瘍底にも同様の異型細胞を認めた。(術後経過)術後LDH(5276IU/L)の上昇を認め確定診断後、CHOP療法を施行した。

示I-228 大腸癌における大動脈周囲リンパ節転移陽性例の臨床病理学的検討

山田赤十字病院外科

小川朋子、村林紘二、中野英明、上原伸一、植田司、高橋幸二、大西久司、野田直哉、岡南裕子

【目的】大腸癌の大動脈周囲リンパ節(216)転移陽性例を臨床病理学的に検討し、216郭清の意義とその適応について検討した。【対象】1982年1月から1998年2月までの大腸癌切除908例中、216陽性の23例。【結果】**癌占拠部位**:A;4例、T;1例、D;1例、S;5例、R;12例。**肉眼型**:2型;13例、3型;7例、4型;2例、5型;1例。**組織型**:高分化;5例、中分化;12例、低分化;5例、粘液癌;1例。**深達度**:mp;2例、ss(a1);4例、se(a2);15例、si(ai);2例。**肝転移**:H0;19例、H1;1例、H3;3例。**腹膜播種**:P0;20例、P1;2例、P2;1例。**遠隔転移**:M(-);21例、M(+);2例。**ly因子**:ly2;3例、ly3;20例。**v因子**:v0;1例、v1;1例、v2;20例、v3;1例。**根治度**:B;15例、C;8例。**予後**(平均生存期間):根治度Bは19.5カ月で5年以上生存は2例であり、根治度Cは7.8カ月で根治度Bと根治度Cに有意差を認めた。【結語】216転移陽性例は予後不良であるが、根治度Bが得られれば、長期生存が得られる症例があり、腹膜播種・遠隔転移を伴わない症例では積極的に郭清を行うべきと考えられた。